

# ゴミを減らして地球に感謝!

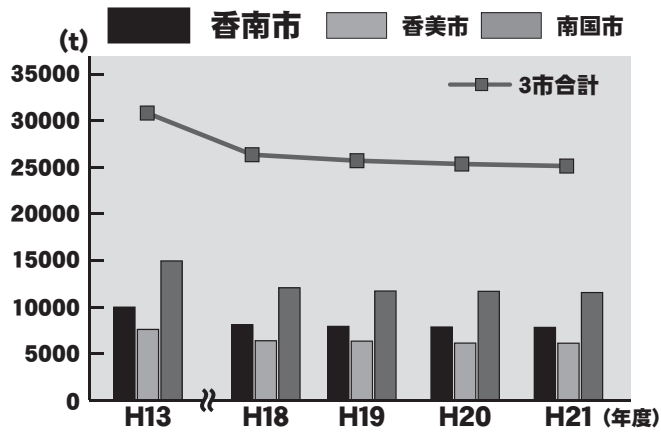


香南市では①ゴミを減らす(リデュース)②繰り返し使う(リユース)③資源として再利用する(リサイクル)を推進しています。今回は、皆さんに取り組んでいただいているゴミの減量について、香南清掃組合で処分したゴミ量の推移をお知らせします。



香南清掃組合は、香南市・南国市・香美市で運営し、皆さんが集積所に出した可燃ゴミを委託業者によって運搬し、搬入されたゴミを焼却処理しています。

## 【香南清掃組合構成市 ゴミ搬入量推移】



※H13年度は旧5カ町村の合計  
※ゴミ等は、委託業者、市役所、有料による搬入量合計

ゴミの減量は、香南清掃組合を構成する各市町村で長い期間取り組んできました。その結果、香南市では合併前の平成13年度の搬入量9,987トンピークに、合併した平成18年度8,086トン、平成21年度7,812トンとなり、合併以後も減少させることができました。また、この量から推計した、一人が1日に排出する量(下表)は平成13年度811グラム、平成18年度646グラム、平成21年度632グラムと減少しています。

## 【一人1日あたりのゴミ排出量推移】

(単位:g)

市	13年度	18年度	19年度	20年度	21年度
香南市	811	646	636	632	632
香美市	615	585	594	584	588
南国市	735	650	637	638	636
3市平均	724	632	626	618	618

※一人当たりの計算: ゴミ搬入量÷収集人口(1月1日現在)÷365日

水分の多い食物を食べる機会が多い季節です。生ゴミの水切りやリサイクルへの取り組みに積極的にご協力ください。

# 「継続は力なり」

可燃ゴミを減らそう

毎年ゴミの量は減っているわ  
ゴミを出さない生活に  
チャレンジー  
地球のためにもっともっと  
ゴミを減らそうー!



香南清掃組合  
ごみ焼却施設



# 見つめよう暮らしと人権

## 【HIV感染者等の人権問題】

### 正しい知識と関心を持ちましょう

現在の社会においては、さまざまな病気、特に感染症に対する正しい知識と理解が十分に普及しているとはいえ、HIV感染・エイズ、ハンセン病や結核などの患者・元患者並びに感染者および家族に対し、感染症に対する誤った知識や偏見などにより、日常生活、職場での迫害、入園や入学の拒否、医療現場における差別、プライバシー侵害などが問題となっています。

感染した人たちの多くは、噂され、蔑(さげす)まれ、冷たい扱いを受けるのを恐れ、自分の病気を周囲に知られないように気を使う生活を余儀なくされています。

もし、自分がその立場になったならどうでしょうか。

周囲に感染症に対する理解者や相談者がいれば、追い詰められた気持ちから開放され、前向きな治療や人生を送れるはずです。

社会的疎外ほど恐怖感を与えるものではありません。私たち一人ひとりが、感染症に対する理解を深め共に生きる仲間として手を取り合うことが必要です。

**H** Human ヒト  
**I** Immunodeficiency 免疫不全  
**V** Virus ウィルス

血液等体液を通して感染するウイルスの一種です。  
主な感染経路は、血液感染、性行為による感染、母子感染等であり、入浴、食器の共用等の通常の社会生活では、感染することはありません。  
HIV感染症にかかり(無症状期間)、HIVによって引き起こされる免疫不全症候群のことをエイズ(AIDS)と呼んでいます。

**A** Acquired 後天性  
**I** Immuno 免疫  
**D** Deficiency 不全  
**S** Syndrome 症候群

HIVを病原体とする感染症で、人体の免疫機能を侵す病気。通常、感染してから平均10年程度の無症状期間を経て発病しますが、最近では、内服治療等によって発症を抑えたり、症状を緩和させたりすることが可能になってきています。



## ハンセン病

らい菌により末梢神経や皮膚が侵される感染症です。感染力は非常に弱く、現在は、外来治療だけで確実に治癒します。  
しかし、これまでの長期間にわたる隔離などにより、家族や親族などとの関係を絶たれ、また、入所者自身の高齢化、後遺症、偏見・差別などのために、療養所での生活を余儀なくされています。

## 「部落差別をなくする運動」強調旬間事業

7月9日(金)「部落差別をなくする運動」強調旬間(7月10日～20日)事業として、車による市内啓発パレードと人権作文の発表、人権講演が開催されました。

人権作文の発表では、土佐高校1年の刈谷文香さんが「脳死は人の死か」と題し、素晴らしい発表をされ、改めて「脳死や人間の尊厳」について考えることができました。

また、フジテレビプロデューサーの栗原美和子さんを講師に招き、「差別のない社会をめざして～太郎が恋をする頃までには～」と題した講演では、本人の体験をもとにまだに解消されない部落差別の厳しい実態や、それを乗り越え生きてきた人間のたくましさ優しさが語られました。また、最後にご主人の村崎太郎さんとの共著の題名『橋はかかる』を引用され、「お互いの心にもきっと橋はかかり差別はなくなるはず。皆さんも一緒に差別をなくすために頑張りましょう。」と力強く訴えられました。



▲栗原美和子さん